

アスリートの肖像

文／中島亮
撮影／築田純

体

育館に衝撃音が響きわたる。バスケットボールと同じ広さのコート内を、両チーム各4名の選手が動き回り、激しくぶつかり合う。車いす競技で唯一タックルが認められた車いすラグビーの迫力は想像以上だ。2018年の世界選手権で日本は優勝。2019年10月に日本で開催されたワールドチャレンジでも、アメリカ、オーストラリアに次いで3位の成績を残した。そんな代表チームにあって、中町俊耶は新しい戦力として定着しつつある。

「最初は野蛮な競技だと思いましたよ」
大学1年の時、首に大怪我を負うまで

ずっと野球選手として活躍していたので、コンタクトスポーツにすぐには馴染めなかった。だが、思い切り相手とぶつかり合う爽快感に徐々に惹かれていった。

「車いすに乗っていると、周りの人から必要以上に気を遣われる。だけど車いすラグビーの世界では衝突や転倒なんて当たり前。倒しても倒されても笑っている。そんな環境が心地よかったです」

車いすラグビーの選手は障がいの程度によって持ち点がつけられる。障がいが重い0.5点から軽い3.5点まであり、同時にプレーする4名の持ち点合計は8.0点以下というのがルール。中町選手は2.0のミド

ルポインター。障がいの重いローポインターの仲間をヘルプもするし、軽いハイポインターの相手に挑んで突破することも求められる。機敏な動きでボール運びもするし、野球の経験を生かしたパスも得意。チームの要の役割を担う。

「海外では観客がビールを飲みながら車いすラグビーを観戦しています。日本でもそのくらいまで定着させたいですね」

魅力を発信するのに、自国開催のオリンピックは絶好の機会。日本屈指のオールラウンダーの活躍からトライが生まれる度、車いすラグビーのファンは確実に増えていくはずだ。

S



なかまчи しゅんや／1994年、埼玉県生まれ。小学校1年で野球を始め、大学1年まで主に左投げのピッチャーとしてプレー。大学1年の冬に事故に遭い、リハビリ中に車いすラグビーと出会う。2015年から2年間ブリッツに在籍した後、2017年に東北ストーマーズに移籍。2018年後半から頭角を現し、今では日本代表を支えるオールラウンダーとして活躍している。

車いすラグビー

中町俊耶



障がい者スポーツの垣根を超える